

## 「鼓ヶ滝で出会った女の子」

増山雄三

山陽新幹線の新神戸駅上りホームの、すぐ背後まで城山が押し寄せ、直線距離にして三〇四百米ほどの山中に、「布引の滝」があるが、その滝の水は、六甲山系の摩耶山と再度山の水を集めた瀬池を水源とし、生田川中流の布引溪流をへて、神戸の港に注いでいる。この滝は、まるで白い布を引くように、二百米ほどの間に四つの滝に水を落して流れ、古くから神戸の名勝の地になっているが、上流から雄滝・夫婦滝・鼓ヶ滝・雌滝という滝の総称を、布引の滝と呼んでいるのだ。

新神戸駅のガードを潜りぬけ、川に沿って五分ほど北に行くと、そこに砂子橋があり、橋のたもとは、鎌倉初期の歌人である、藤原定家の「布引の滝のしらいとなつくれば絶えずそ人の山ちたつぬる」という歌

碑があり、橋を渡ると、左側が布引公園にな  
っっていて、ここが滝めぐりの出発点だ。  
老人には少し辛いのが、急な石段を登って行  
くと、やがて「雌滝」の鑑賞スポットになっ  
ている観瀑橋がみえてくるが、雌滝は、高さ  
十九米ほどの、小振りでしなやかな滝で、何  
となく上品な流れである。  
滝の右手前には、アーチ状に石を積んで造  
られた取水堰堤が建っているが、立入禁止で  
中には入れないが、三個の制水弁があり二十  
四インチのパイプが設置され、ここで汲み上  
げられた水は、下流の砂子橋を通過して、今で  
も奥平野浄水場に送られる。  
雌滝をみたあと、五分ほど更に登って行く  
と、やがて「鼓ヶ滝」にやってくるが、この  
あたりは木が生い茂っていて、滝の姿は見え  
難いものの、滝の音が、まるで鼓を叩くよう  
に聞えてくる。  
そして道の片隅には、紀貫之の「松の音  
琴に調ふる山風は、滝の糸をやすけて弾くら

む」という歌碑が建っていて、そこに音楽学  
校の学生だという一人の女の子が、二胡を持  
ってその前に横すわりに座り、石に刻まれた  
その文字を、一生懸命に見つめている。  
　　どうやらこの和歌を詠みながら、頭の中で  
懸命に曲想を練っていたようなので、それを  
みた私が、折角ここまでできたなら「滝の奏  
でる鼓の音を、曲の中にとりこめば、素敵な  
ものになるかもしれない」と言ってみた。  
　　すると、彼女は暫く考えていたようだった  
が、どうやら曲想が少しずつ浮かんできたよ  
うで「ぜひ　そうしてみます！」と眼を輝か  
せ、「雄滝」を目指して歩き始めた私に向っ  
て、手を振って見送ってくれた。  
　　高さ四十三米の雄滝は、四つの滝の中で一  
番長く、岩頭から五段に折れて落下し、四百  
トン以上の容積があるその滝壺の下にあるの  
が「夫婦滝」で、二筋から仲睦ましく一筋に  
なつて落下し、なかなかの壮観である。  
　　ここでは、在原行平の「我世をは　今日か

明日かと待つ甲斐の  
涙の滝と  
いつれ高け  
む」という歌が締めてくれた。

「鼓ヶ滝で出会った女の子」の二胡演奏を  
ぜひとも聴きたかったが、とりあえず滝の西  
側にある、滝山城址のある城山へと向った。

令和三年二月